

# 三鷹中央学園



## 平成30年度 三鷹中央学園の評価・検証 結果報告

検証項目	<b>1 コミュニティ・スクールの運営</b>	
目標	コミュニティ・スクール委員会の組織を活用し、連携しながら、学校、保護者、地域が一体となった取組を推進し、協議と支援の充実を図り、目指す学園生像の実現に努める。	
取組	<p>①役員会（正副会長と3校長）が中心となって、組織を円滑に運営することができるよう、役員会を定期的かつ必要に応じて開催する。事務連絡は電子メールを活用し、積極的に情報の共有化を図る。</p> <p>②学園とコミュニティ・スクール委員会等との合同研修会を実施し、相互に組織や活動計画について理解と改善を図り、年間を通じて学校・地域・家庭の協働化を推進する。</p> <p>③地域人材や学習ボランティアの有効な活用等の支援、学校評価における学校運営の改善に向けた協議等、具体的な取組や顕著な成果を通じた広報を積極的に行い、説明責任を果たしながら、地域・保護者との連携・協働を図る。</p>	
	成果	課題と改善方策
	<p>①役員会を13回程度開催し、可能な限り事務連絡等は電子メールを活用して、負担軽減を図りながら、情報の共有化を図ることができた。さらに、副会長を通じて各担当との情報連携ができた。担当制の定着、委員会での協議の充実、規約の改正により、各委員が活動全体への意識をもって取り組むことができた。</p> <p>②合同研修会への（一社）みたかSCサポートネットや学習ボランティア事務局の参加が定着し、教職員との連携が意識化されてきている。教職員のコミュニティ・スクール委員会の活動への理解も深まり、委員の学校教育への意識の高さと理解の深さもあいまって、より良い協働が実践できている。</p> <p>③地域人材や学習ボランティアの活用は、小学校のマップづくりや中学校のキャリア教育（職業インタビュー等）の支援に生かされていた。</p>	<p>①年度末で、CS委員会発足当時から委員が任期満了となることもあって、大幅な委員の入れ替えがある。10周年を迎える年にもあたり、これからのCS委員会のあり方、持続可能な制度の工夫を模索しながら、新たなCS委員会の構築を図っていく必要がある。</p> <p>②教職員とCS委員が合同研修会のような場で、一緒に協議したり、勉強したりする機会を設けることは、CSの活動に対して良い効果をもたらすことがわかっている反面、教育活動への影響や働き方改革の推進も踏まえると、機会を増やすことは時間的に非常に難しい。このような機会を工夫してさらに設けたり、代替となるような方策を考えたりすることが課題である。</p> <p>③地域人材やボランティアの活用については、計画段階からの綿密な打ち合わせが必要である。学校が年度当初の計画段階から要請し、連絡・調整を図りながらより円滑に進めることが課題である。</p>

検証項目	<b>2 小・中一貫教育校としての教育活動</b>	
目標	<p>「15歳の姿に責任をもつ」教育活動を推進する。</p> <p>①学園研究会を核として、思考力や表現力等を育む指導を工夫する。</p> <p>②交流活動の一層の充実を図る。</p>	
取組	<p>①「主体的・対話的で深い学び」「カリキュラム・マネジメント」を学園研究のキーワードに2年間にわたって研究した成果と課題を、毎回の授業を実践の場として活用し、教科等の特性を踏まえた指導方法の工夫に取り組みながら、「考える授業、伝え合う授業」を実現する。</p> <p>②児童・生徒交流を豊かに展開し、学園生が共に学び合う意識や学園への帰属意識を向上させる。また、保護者・地域と共に学園間の連携を図った活動を実施し、活動の内容を広く保護者や地域に周知することで、活動の活性化を図る。</p>	
	成果	課題と改善方策
	<p>①今年度の学園研究は、2年間の市の研究協力校での研究成果をベースに、実践で生かすことをねらいとして行った。研究授業を年間8本実施し、研究授業だけに焦点化せず、日常の授業に研究成果を取り入れる試みを分科会ごとに行った。学園・学校評価（児童・生徒対象）アンケートにおいては、授業に対する肯定的回答が概ね8割から9割前後に達している。この3年間、3校の教員が共通の課題意識をもち、共通の取組を推進してきた成果であると考えられる。</p> <p>②小・小交流の集大成として位置付けられる自然教室では、合同班編成をはじめ、三小・七小の同一行程での実施も定着している。小・中間の交流も、運動会やあいさつ運動など、多くの機会を設け、定着してきた。交流に関して、6年生の90%以上が学園交流に関するアンケート項目で肯定的に回答していることから、学園生としての意識付けを10周年に向けてさらに強化していくことが肝要である。</p>	<p>①次年度は、小・中一貫カリキュラム三鷹中央学園版を取りまとめ、その翌年の小学校新学習指導要領の全面実施に備える。小学校の採択教科書が決まり次第、カリキュラムに微調整を加えてより具体的な指導内容や評価方法を研究して行くことが課題である。それに応じた学園研究組織を構築して、研究を進めていく。</p> <p>②学園交流活動に関して、児童・生徒の交流については理解が深まってきたと感ぜられる。一方で、同様に学園三校の教員が協力して行っている学園の取組については、保護者の理解が深まらない。学園評価アンケートでも、わからないという回答が多い。今後、広報等で一層周知を図り、学校公開などで見える形で示す必要がある。</p>

検証項目	<b>3 (知) 確かな学力</b>	
目標	「三鷹中央学園パワーアップアクションプラン・すすんで学ぶ人」の取組内容を基に、学校・家庭・地域の実践内容を具体的に展開し、学習習慣の改善を図り、確かな学力を育む。	
取組	<p>①「三鷹中央学園パワーアップアクションプラン」を「三鷹『学び』」のスタンダード(学校版及び家庭版)とともに活用し、児童・生徒の実態を踏まえて、取組項目を計画的に実践する。特に学習習慣の定着に向けて、家庭で取り組むことを学校から発信するよう努め、連携を図る。</p> <p>②学力(集中力・読解力・表現力)の育成を図るよう、年間を通した「朝読書」をはじめ、系統的・継続的な読書活動や「学園推進図書」の活用に取り組み、読書習慣につなげる。</p>	
	成果	課題と改善方策
	<p>①児童・生徒アンケートの「学校の授業がよくわかる」について、小学4年生以上以上の9割以上、中学生の8割以上が肯定的に回答し、昨年度のレベルを維持している。また、「苦手だった科目ができるようになった」の肯定的回答も、小学校で8割以上、中学校で6割以上となっている。学園での地域未来塾の活用や学園研究の成果を踏まえた授業実践の積み重ねが反映されてきていると感じる。</p> <p>②児童・生徒、保護者アンケートとも、読書に関する項目は、7割以上が肯定的な回答である。学校図書館の連携、及び各校の図書指導の成果であると考えられる。</p>	<p>①保護者が子どもの学習にどの程度かかわっているかのアンケート結果では、宿題の完了を確認する保護者は多かったものの、一緒に個別に学習を見ている保護者は少なかった。家庭学習の習慣化には、家庭の協力が不可欠であるが、実状に合わせたパワーアップアクションプランの内容の再検討も必要となってきた。あわせて、引き続き、9年間で段階的に家庭学習に取り組めるよう、家庭の状況をそれぞれの学校で踏まえながら、方策を考えていくことが課題である。</p> <p>②読書量と学力の相関関係は、数値的にも調査で明らかになっている。読書の推進が学力の向上にもつながることを踏まえ、読書に対する肯定的な割合がまずは8割を超えるように、児童・生徒自身が生活時間を見直し、読書時間を確保して習慣化を図るよう学園全体で、また各校でも指導を継続していく。</p>

検証項目	<b>4 (徳) 豊かな人間性</b>	
目標	地域・保護者と連携し、各校の「学校いじめ防止基本方針」に基づいた取組を着実に実施して、いじめを防止する。また、学園生活指導重点目標の実現を図り、自己肯定感・自己有用感をもつ学園生を育む。	
取組	<p>①学園生活指導委員会を中心に継続的なあいさつ指導に取り組み、「あいさつは、自分から。返事は『はい。』」を徹底する。コミュニティ・スクール委員会をはじめ地域・家庭と連携しあいさつの機会づくりを推進する。</p> <p>②「ネットいじめ」を含む「いじめ問題」の根絶に向けて、学園の組織を生かした生活指導体制を整え、3校が連携を図る。「三鷹中央学園児童・生徒SNSルール」を生かした取組を引き続き実践する。コミュニティ・スクール委員会等と協議し、いじめ等の問題行動を防止するよう、「学園・地域・家庭が連携した取組」を推進する。</p> <p>③児童・生徒の主体的・積極的な取組を学校・家庭・地域のそれぞれの立場で意図的に企画し、自己肯定感・有用感の醸成を図る。</p>	
	成果	課題と改善方策
	<p>①学園共通重要取組目標である「あいさつは自分から。返事は、『はい。』」の徹底は、様々な取組を通しておおむね達成できている。特に家族や教職員、友達に対するあいさつは、多くの児童・生徒に習慣付いていることが、アンケート結果から読み取れる。</p> <p>②児童・生徒アンケートの「自分の学校にいじめがおきないようにしている」「友達の良いところを認めたり、思いやりのある態度で接したりしている」について、いずれも肯定的回答が小・中共に8割以上である。「学校いじめ防止基本方針」に沿って、CS委員会の取組や学園全体の目標としていじめの根絶をめざす取組を通して、児童・生徒の意識の中に自らいじめを無くそうとする姿勢が育ってきていると考えられる。</p> <p>③「自分は誰かの役に立っていると思う」について、小・中共に肯定的回答が7割近くに達し、経年の変化をみても上昇傾向にある。学校・家庭・地域がそれぞれ子どもに活躍の場を与え、意識付けを行ってきた結果といえる。</p>	<p>①児童・生徒アンケートでは、家族や教職員、友達に対するあいさつは概ねできているものの、地域や校内にいる保護者、来校者等へのあいさつの習慣化は不十分である。来年度は、児童・生徒の安全面にも配慮しながら、校内、校外を問わず、あいさつの励行を指導していくことが課題である。</p> <p>②これまで取り組んできた、三鷹中央学園児童・生徒代表者会議を通しての児童・生徒自ら主体的に取り組む姿勢を継続する。いじめの有無だけでなく、未然防止や早期発見対応の重要性を保護者にも啓発し、学校と家庭が連携してできる対策を講じていく。</p> <p>③依然として自己肯定感、自尊感情が低い児童・生徒が一定数いる。これまで以上に、子ども一人一人の活躍の場、成就感を得られる場を作り、声かけや表彰など、あらゆる機会を通じて自己肯定感や自己有用感の醸成を図っていくことが課題である。</p>

検証項目	<b>5 (体) 健康・体力</b>	
目標	発達段階に応じた体力・運動能力・防衛体力が身に付くように、生涯にわたって健康や体力に興味・関心をもち、自ら取り組もうとする態度を育む。	
取組	<p>①学園各校の体力調査等における課題を踏まえ、計画的に体力向上や健康推進のための活動を充実させる。その際、小・中教員が相互に連携するとともに、家庭や地域とも連携して、児童・生徒に望ましい生活習慣及び運動習慣を身に付けさせる教育活動を推進する。</p> <p>②オリンピック・パラリンピック教育の充実を図り、運動を「する」だけでなく、多様な関わりができるように計画的に指導し、運動を通して文化や環境等への関心も高める。</p>	
	成果	課題と改善方策
	<p>①中学校での朝マラソンや学年駅伝大会、小学校での体づくり運動や運動旬間の実施により、体力・運動能力は、多くの項目で都の平均値を超えるか同程度のレベルを維持している。また、児童・生徒の関心・意欲も高い。食育の取組においても、栄養士や養護教諭と連携した取組を通して、けがや病気をしない防衛体力の向上が図られてきている。</p> <p>②授業をはじめとする日常的な取組に加えて、車いすバスケットボールのパラリンピアンや狂言の講演会を開くなど、オリンピック・パラリンピック教育を学校教育全体を通して行うことで、2年後に開催されるオリンピック・パラリンピックをきっかけに、スポーツだけでなく、伝統文化や異文化、障がい者や環境への興味や関心が高まった。</p>	<p>①特に小学校では、放課後など、学校以外での運動量の減少が、体力・運動能力の向上の阻害要因となっている。生涯にわたる体力向上や健康増進の姿勢を身に付けさせるため、児童・生徒や家庭への啓発を一層進めていくことが課題である。</p> <p>②オリンピック・パラリンピック教育は、概ね予定どおりに展開されているが、開催後を見すえた持続的な取組につながるよう、今のうちから計画しておくことが課題である。</p>

検証項目	<b>6 特色ある教育活動</b>	
目標	「防災の中央学園」と呼ばれる防災教育の一層の充実を図り、自助・共助・公助を通して、防災の知識と自己肯定感・有用感を育む。	
取組	「三鷹市教育ビジョン 2022（第一次改定）」の考えのもと、コミュニティ・スクール委員会を核に、学校と地域、(社)みたかSCサポートネットとの協働を進めるなかで、その中心となる「防災教育」については、9年間の系統的な防災教育を実施するとともに、防災についての学びを生かす場として、地域防災訓練に参加し、地域に貢献できる学園生の姿を地域と共有する。	
	成果	課題と改善方策
	<p>①(一社)みたかSCサポートネットや市防災課、地域諸団体との防災によるつながりが一層深まり、共通理解による9年間を見通した防災教育の一層の推進を図ることができた。</p> <p>②防災に関する児童対象の学園・学校評価アンケートでは、児童・生徒の肯定的評価が9割を超える結果となり、質問項目の中でも最も高い数値であった。このことから、これまでの防災教育の積み重ねが、児童・生徒に身に付いていると言える。</p>	<p>①防災教育の9年間の系統的な内容配列は概ねできあがっているが、各発達段階での指導内容については、引き続き検討していく必要がある。(一社)みたかSCサポートネットと協働しながら、教材(カンガエル防災)の改訂や新しい視点での指導内容の工夫を考えていくことが課題である。</p> <p>②地域防災訓練への参加については、小学生は保護者とともに参加すること(町内会単位)が通例であることや、中学生は部活動の公式戦の時期と重なることから、例年、なかなか多くの人数の参加が見込めない。防災教育において、実体験は欠かせないプロセスであり、来年度は中央学園を会場としてコミセンの総合防災訓練が開催されることから、防災に特化した授業日として多くの児童・生徒が参加する形態を工夫していくことが課題である。</p>

検証項目	7 学校教育の質の維持向上を目指した学校の働き方改革	
目標	教職員が意欲をもって、前向きに職務に取り組めるようにするため、実勤務時間の縮減や疲労回復につながる働き方改革を推進する。	
取組	①各校の校種や実態に応じて、退校目標時間やノー残業デー等を設定するなどの工夫を行う。 ②教員自身が意識を改め、効率よく職務を進められるように考える。 ③スクールサポーターなど、人的配置により効率化が進められる部分は、積極的に活用する工夫をして、効果が上がるようにする。 ④地域行事等への積極的な参加は、コミュニティ・スクールを進める上では必要不可欠ではあるが、管理職が計画的な参加を工夫し、教職員の負担過重にならないようにする。 ⑤「三鷹市立中学校における運動部活動の方針」を踏まえた部活動の適正化を図る。	
	成果	課題と改善方策
	①実勤務時間の縮減のため、各校の実情に応じて、夏季休業中に閉庁期間を設けたり、定時退勤日を設定したりすることで、教員の心と体に余裕が生まれ、働き方改革に対する意識が高まった。 ②ノー残業デーの確実な実施や休憩時間の確保をしたり、運動部活動の方針に従った働き方の運用を行ったりするなど、各校の実情や校種の特性に応じた働き方改革を推進することで、教員の負担軽減と教育活動の円滑化を図ることができた。	①働き方改革の取組は、年度途中から始まったこともあり、学園・学校評価アンケートにおいても、わからないという回答が過半数を占めた。働き方改革によって生まれた余裕が、教育活動にどう生かされているのかなど、具体的な事例を示し、周知を図って、理解を求めていくことが課題である。 ②今年度の取組に加えて、来年度から始まる働き方改革のための新しいシステムや制度についても年度当初からわかりやすく説明し、周知を図るとともに、時間外の様々な活動について、コミュニティ・スクールの教員としての働き方改革の工夫をしていくことが課題である。

## 平成30年度 三鷹中央学園の評価・検証結果のまとめ

(1) から (7) の検証結果を踏まえて	1 「小・中一貫教育」及び「コミュニティ・スクール」の取組において特によい成果が得られたこと
	①安定したCS委員会の運営の下、委員と教職員が協働する場を設けたり、意見を有効に出し合える協議や研修の設定をしたりして、充実した協議を行うことができたことは成果である。 ②学園研究の成果を基に、学園研究を進める中で、3校が一体的に研究活動に取り組むことができたことは成果である。研究の成果と課題を実際の授業の中の実践につなげて研究を深め、授業改善に対する意識の向上や日常の授業における改善が見られたことは成果である。 ③「防災の中央学園」という特化した活動が活性化し、地域や市と共に防災教育の充実を図り、保護者の意識も高まったことは、成果である。
	2 今年度に明らかになった課題のうち、特に次年度の重点とすること
	①CS委員が10名以上交替する年度となる中、これまでの活動のよさを継続し、これからの新たな活動方法を策定しながら、「三鷹中央学園パワーアップアクションプラン」の再検討もふくめて協議体としてのCS委員会を活性化させていくことが課題である。学校・家庭・子ども・地域が、共通のゴールに向かって、それぞれの立場で行動につなげ、教育目標の達成につながる児童・生徒の資質・能力の育成を図ることが課題である。 ②学園研究の成果を継続的に実践に生かし、再来年度から始まる新学習指導要領の全面実施に備えて、小・中学校一貫した、変化の激しい時代に対応できる力を児童・生徒に付けられるよう、授業改善を継続する。 ③児童・生徒の自己肯定感や自己有用感を育む取組を継続する。家庭や地域の理解・協力を得られるよう啓発する。
	3 「2」の重点課題を解決するための改善策
①CS委員会の活動や組織の見直し、新学習指導要領の趣旨を踏まえたパワーアップアクションプランを再検討する。 ②市の原案をベースに、「三鷹中央学園小・中一貫カリキュラム」を研究し、年度末までに策定することで、新学習指導要領の全面実施や新しい採択教科書への対応に備える。 ③児童・生徒の主体的な取組を発達段階や実態に応じて実施し、コミュニティ・スクール委員会や各種地域団体、保護者会等で話題にする。	